

## 語用論的英米差に関する覚書

she と homely を例にとって

川 村 晶 彦

### 1. はじめに

英語教育において語用論の重要性が叫ばれるようになって久しい。しかしながら、様々な要因から語用論が積極的に現実の教育の現場および教材に取り入れられることは少なかったように思える。近年、少なくとも EFL 辞典においては語用論情報があたかも学習辞典における標準装備でもあるかのような様相を呈し始めたが、その辞書においてさえ語用論に対する扱いはまだまだ発展途上であり、今後のさらなる進歩が望まれる (Nishikawa 2006)。

本小論では、紙数の都合もあり、英語教育における語用論の扱いといった大きなテーマを包括的に論じることはせず、ここ数年、論者が関心を持ってきた語用論的英米差とその教育的価値について she と homely の2語を例として考えてみたい。

### 2. 同一言語内での語用論的失敗

近年刊行される英語学習書の中にはいわゆるイギリス英語(以下 英国語)、アメリカ英語(以下 米国語)といった英語の変種間の差異に焦点を置いたものが目立つ(e.g. ジャパンタイムズ 2000, 2003)。また、授業中の学生とのやり取りからも米国語と英国語の違いに関心を持っている学習者が多いことに驚

かされる。中でも特にこの2大変種の発音の違いに関心が高いようであるが<sup>1)</sup>、両者における語用論的な違いについて耳にすることはほとんどない。語用論というものの自体が教育の現場において市民権を得たとは言えない状況においては無理もないが、語用論というターム自体は用いずとも、こういった内容を扱う書籍を目にすることは多く、語用論的なものに対する潜在的な関心の高さは窺い知ることができる (e.g. 松本・松本 1987; 脇山 1990; 福田 2001)。

また、語用論的失敗<sup>2)</sup>は単に言語使用の誤りでは済まされない (Leech and Thomas 1987) という指摘もある点は見逃してはならない。語用論的失敗は文法や発音の間違いとは異なり、すぐにそれと気がつかないことも多い。したがって、言語使用の問題というよりは話者の意図そのものと解釈されることがあり、最悪の場合、人格の否定といった深刻な問題にもなりかねない。たとえば、特定の民族や国民に対するステレオタイプを形成し (Thomas 1983)、いわゆるジャパン・バッシングのようなものの引き金にもなりかねないという危険性も指摘されている (東 1994)。無論、こういった深刻な誤解が生じる場合を抜きにしても、実際のコミュニケーションにおいてよりよい人間関係を築いていく上でも語用論的なストラテジーについて学んでおくことは有用であるに違いない。いずれの場合にしても、語用論の教育的価値が大きいという点は疑うべくもない<sup>3)</sup>。

これまでに語用論的失敗の主な原因になりうると指摘されているものには (1) 母語のストラテジーを外国語におけるコミュニケーションにそのまま持ち込んでしまうマイナスの転移 (川村 2005)、(2) 学校教育そのものの誤り (Thomas 1983) といったものがある。(2) に関しては、今後の研究の発展によって解消されるべきものであり、より本質的な問題として注意が必要なのは (1) であろう。語用論的失敗そのものの議論は本小論のテーマからそれてしまうため、ここでは詳しく論じないが、特に英語のように世界中で広く話されている言語の場合、同一の言語を母語とする話者間であってもそれぞれが母語とする変種間で語用論的ストラテジーが異なる場合はありえよう。つまり、外国語だけでなく同一言語によるコミュニケーションであっても語用論的失敗は起こりうるはずである。

本小論では、2005年に行った対照語用論調査の中から実例を挙げて、英語、その中でも英国語・米国語という2大変種の語用論的差異とその教育的価値について考察する。仮に両者の間に大きな語用論的な差異が存在し、かつそれが

深刻な語用論的失敗につながりうるのであれば、日本の英語教育における米国語のように特定の変種に偏重した教育を行っている場合、語用論的英米差についての理解を深めることが極めて重要だと信じるからである。

### 3. 調査方法について

これまでも国内外で様々な対照語用論的調査が行われており、非常に信頼性の高いものもあれば、語用論的調査において重要な変数のコントロールが十分でないものも多い(e.g. 柏野 1996)。ただし、学術的な調査全般に関して言えることは、教育目的への応用を考えた場合、扱っている項目数が非常に限られているということである(Kawamura 2006)。また、教育的観点からは、ある特定の表現が特定の場において不適切な言語使用となる場合、不適切であると指摘するだけでは不十分であり、そういった場合における代替表現を示す必要がある (ibid.)。しかしながら、そこまでカバーしている研究は現時点では見当たらない。さらに、既に述べたように、学術的な調査以外でも語用論的なテーマを使った書籍は目にする事が多いが、そういったものの中には、データに基づかず、主に著者とその周辺の人物の経験を根拠とするものも目立つ。したがって、現時点では、英米人が日常の言語使用において語用論的にどのような振る舞いをしているのか、実際のところは分からない場合も多いのである。このことは日本人学習者についても同様である。同じ日本人であっても、日本人の英語学習者が実際に特定の表現をどのように用いているのか、はっきりとしたことは分からない場合が多い<sup>4)</sup>。そのため、そういったこれまでの研究の不備を克服すべく、大規模な対照語用論調査を行った<sup>5)</sup>。

本調査は英米に在住の英語の母語話者 103 名および首都圏に在住の日本人大学生 114 名 (男性 48 名, 女性 66 名) を対象とし、母語話者向けの調査はウェブ経由で、日本人学生対象の調査は印刷されたアンケートへの配布と回収を郵送等の手段を通じて行った。母語話者のインフォーマントの構成は以下の通り:

社会イノベーション研究

年齢	米 (男/女)	英 (男/女)	計 (男/女)
10 - 19	2 (0/2)	12 (6/6)	14 (6/8)
20 - 29	21 (10/11)	23 (11/12)	44 (21/23)
30 - 39	13 (3/10)	14 (6/8)	27 (9/18)
40 - 49	8 (3/5)	7 (7/0)	15 (10/5)
50 - 59	3 (1/2)	0 (0/0)	3 (1/2)
計	47 (16/30)	56 (31/26)	103 (47/56)

総調査項目は約 600 に及ぶが、今回は特に英米差が目立った she と homely の 2 語について考えてみることにする。

#### 4 . she<sup>6)</sup>

英語が日本語と比べて代名詞を多用する言語であることはよく知られている。そのため、英語では代名詞の使用が最も自然な場合でも日本語ではその代名詞そのものを省略する、あるいはその代名詞が指す名詞に置き換えた方が自然な表現となることも多い(安西 1982)。言い換えるならば、日本語の感覚であれば代名詞自体を用いない、あるいは名詞を繰り返しても問題がない場合であっても、英語の場合は、代名詞を用いる方がより自然な表現となることが多いということである。

しかしながら、英語の場合も、たとえば、目の前にいる人物を指して 3 人称の代名詞を用いることは失礼なので避けるべきである、と言われることがある。それが事実とすれば、目の前にいる名前を知らない相手に言及しなければならない時、代名詞を用いることはできないのだろうか。また、仮に用いた場合、それは実際に不適切な言語使用と認識されるのだろうか。仮に学習者が相手の名前を知らないのであればやむをえないと判断して代名詞を使用した場合、どのような問題が起こりうるのだろうか。この点について、以下のような設問を設定し検討を行った：

##### Should we avoid 'he' and/or 'she'?

'He' or 'she' should not be used to refer to a person when the person is in

語用論的英米差に関する覚書

front of you or when the person is near you. Do you agree?

You are waiting for your friend Mary outside a shop, when a female passer by asks you where she can find the museum. However, you are a stranger yourself in that neighborhood, so when Mary comes out of the shop you ask her if she knows the way. Would you say 'Mary, she's looking for the museum. Do you know where it is'?

いずれの設問もタイトルに続いてイントロダクションで設問の狙いを提示し、インフォーマントが調査内容とは直接関係のない箇所に反応して単に個人的な好みで回答するような事態を避けるよう努めた。また、いずれの設問も年齢、性別、関与者間の社会的距離、力関係等の変数をコントロールするため、基本的な設定は変えず、話者の性別等一部の項目のみ変更してたずねることも行った<sup>7)</sup>。

結果は以下の通りである（調査方法やインフォーマントに関して詳細は Kawamura 2006 を参照。実際のインターフェイスは付録を参照。）:

表 1 she の許容度に対する回答結果

米 YES	英 YES	日 YES	米 NO	英 NO	日 NO
71%	30%	86%	29%	70%	14%

驚くべきことに、she という英語の中で最も基本的な語の 1 つと言ってもよい代名詞の許容度に関して、米英で全く正反対の結果となった。また、理由に関してみても、米で YES と回答したインフォーマントの多くが「名前を知らないのであれば仕方がない」とコメントしている一方、英で NO と回答したインフォーマントは口を揃えて「こういった she の用い方は失礼である」、「無礼である」とコメントしているのである。

このような相違が何に起因するのか、今回の調査結果だけから導き出すことは困難であるが、こういった状況における she の使用は上記の数値から予想される以上に深刻な語用論的失敗を引き起こす危険性が高い。つまり、上記のような she の用法は、米側ではあまり問題視される可能性が高くないが、英側では、不適切な言語使用として許容されない可能性が高い。したがって、相手の

名前を知らないために、やむをえず代名詞を使った場合であっても、英側では不快に感じられる危険性が高く、話者の意図に反して、無礼な人間であるとのレッテルを貼られてしまうという深刻な語用論的失敗につながりかねない。

興味深いことに、日本人学習者の場合も米と近い傾向が見られた。冒頭で述べたように、語用論的なものはまだ本格的に英語教育に取り入れられていないため、これは偶然の一致かも知れないが、ひょっとすると日本人学習者を取り巻く英語圏の文化、たとえば映画、TV ドラマ、音楽といったものの圧倒的多数が米国からのものであるという事実が影響しているのかも知れない。いずれにしても、本調査の結果を見る限り、日本人英語学習者が特に英国人に対して語用論的失敗を犯してしまう危険性は高いと言えよう。次の *homely* では英国語に対して米国語が強く影響を与えているらしい様子を伺える。

## 5 . *homely*<sup>8)</sup>

英米で語義の解釈が異なる例として従来から知られているものに *homely* がある<sup>9)</sup>。以下はここ1, 2年以内に刊行された最新の学習者向け英英辞典における関連語義の記述である：

3 (*BrE, approving*) (of a woman) warm and friendly and enjoying the pleasures of home and family

4 (*NAmE, disapproving*) (of a person's appearance) not attractive

*OALD7* (2005)

2 If you describe a woman as *homely*, you mean that she has a warm, comforting manner and looks like someone who would enjoy being at home and running a family. [BRIT]

3 If you say that someone is *homely*, you mean that they are not very attractive to look at. [AM]

*COBUILD5* (2006)

PLAIN plain or ordinary, but pleasant: *The hotel was homely and comfortable.*

UGLY US DISAPPROVING describes a person who is unattractive

CALD2 (2005)

CALD2 の最初の語義は特に人を対象としたものではなく，人に用いた例文も収録されていないが，OALD7 と COBUILD5 の記述を見る限り，英では特に女性の内面的な性向について好意的に描写する際に用いられるということである。米では上記の3冊の辞書いずれも性別を問わず，人の容姿があまり優れていない場合に用いられるということである。

上記の辞書記述が正確とすれば，homely は，英では特に女性の内面に対する賛辞として使用可能であるが，米ではそのようには解釈されず，他者の外見に対する侮辱と受け取られる危険性が高い。話し手の意図が聞き手には正確に伝わらない，それどころか，全く逆の意味に受け取られてしまうこともありえるという意味で，これも語用論的失敗の潜在的な原因となりかねない。この点を検証するために以下の設問に回答を求めた：

#### How should we use the word 'homely?'

Especially when talking about a woman the word 'homely' can sometimes be ambiguous; and might even sound offensive. If this is the case it might be better to avoid the word altogether. Do you agree? Please answer the following question:

Roger, a close friend of yours introduces you to his elder sister Susan. She has a warm, comforting manner and looks like a woman who would enjoy being at home and running a family. If someone asks you what Susan is like, would you say 'She is a homely person?'<sup>10)</sup>

表2 homely の許容度に対する回答結果

米 YES	英 YES	日 YES	米 NO	英 NO	日 NO
2%	36%	28%	98%	64%	72%

米英ともに NO という回答が多く，特に米では圧倒的多数が NO と回答して

いる。

she と異なり、今回はコメントも多岐にわたるため、いくつか目立つものを引用しておく。米で NO と回答したインフォーマントのコメントには(1) I've never heard the word homely used like that before, even though it may be dictionary correct. (米・20代・女性), (2) Homely is unambiguously derogatory. (米・30代・男性), (3) To me, "homely" always implies unattractive/ugly[.] (米・40代・女性)といったものが多く、世代、性別を問わず、homely が好ましい意味で用いられることはないようである。

一方、英では(4) For the exact reason that it is ambiguous. It suggests that she is a rather large woman. (英・20代・女性), (5) [S]ounds old-fashioned. Not part of my 'working vocabulary' (英・40代・男性), (6) 'Homely' is almost never used in modern British English. It would sound old-fashioned and give an impression of a plump housewife. (英・30代・女性)といった意見が目立ち、英側では確かにこの語の持つ二義性が意識されているようである。しかし、同時に、現在ではあまり用いられないというコメントも多く見られた。

次に YES と回答したインフォーマントの意見であるが、英米差という点に関しては、NO という回答の中ではあまり言及されることが無く、こちらの方が関連するコメントは多く寄せられた。ただし、米側で YES と回答した人数は1名のみであり、コメントは無記入であったため、以下はいずれも英側のインフォーマントから寄せられた意見である：(7) I'm British so this is OK, but I am aware that it has a different meaning in American English. (30代・女性), (8) [H]omely in UK has a good meaning, but in U.S. has a bad meaning[.] (20代・男性), (9) But I would not say that to her face because she might misconstrue the meaning and take offense. (20代・男性), (10) [B]ut this could also imply 'fat' or 'boring' - be careful! (30代・女性), (11) [I]t is a nice way of describing a friendly person[.] (20代・女性)。ここでも二義性は確かに意識されており、かつ、それが英米差と関連付けられている。また、英側の NO という回答の中には、この用法が古風なものだという意見も目立ったが、この YES のコメントと併せて考えてみると、少なくとも現時点ではまだ若い世代であっても通用するものであるらしい。

こうしてみると、辞書の記述に裏付けされるように、homely の許容度に関して英米差は確かに存在し、英では好ましいイメージも保持しつつある。その



意味では、こういった英の用法を知っていくことは有益に違いないが、英においてもあまり好ましくない意味と解釈されうる可能性が高く、辞書の記述に見られるように明確な境界線があるものではない<sup>11)</sup>。また、米に同化という形で語義が変化しつつあるように見える点も興味深いところであるが、教育的な観点から言うと、まずは、この語の持つ否定的なニュアンスに学習者の注意をこれまで以上に向けた必要性がありそうである。米だけでなく、英においても思いがけず相手を侮辱するといった語用論的失敗を犯す危険性が高いからである。

## 6. むすび

近年のポライトネストに対する関心の高まりにつれて、対照語用論的研究も盛んになってきたが、日本語と英語の比較のみを研究対象としていても、上記のような違いは見えてこない。また、当然ながら米国語のみ、あるいは英国語のみを見てもこういった差異は見えてこない。もちろん、今回は、she, homely というたった2例を扱ったに過ぎず、今後、対象を拡大し、語用論的な英米差の原因となりうる背景にまで目を配った上で綿密な調査を行う必要があることは言うまでも無い。

ただし、たった2例を見ただけでも、同じ英語の変種である米国語と英国語の基本語彙の中にも大きな語用論的差異があるらしいことは見て取れる。そして、そういった差異が外国人学習者にとって十分に学ぶべき価値があるものであることは確かだと言えるのではないだろうか。今後、更なる研究が期待される分野と言えそうである。

\* 本小論は平成 18 年 6 月 18 日、中央大学多摩キャンパスにおいて開催された日本英語表現学会第 35 回大会で「日英米対照語用論研究のすすめ」と題して行った口頭発表に加筆修正を加えたものである。発表の際および後日有益なコメントを下された関係者の方々、特に司会として発表全体に貴重な助言を下された山本英一先生、語用論そのものについて見直す機会を下された村越行雄先生、文学作品における homely の使用例をはじめ貴重な示唆を下された杉山隆彦先生、辞書における記述に目を向けてくださった岸暁先生にはこの場を借りて厚くお礼申し上げたい。

注

- 1) 2006年から始まった TOEIC の新テスト方式のリスニング・セクションにおいてはこれまでの米国語偏重から他の変種も等しく扱っていかうという方針への転換が見られる。今後は各変種間の差異もこれまで以上に考慮に入れる必要が出てくるであろう。
- 2) 語用論的失敗とは何を指すのか、明確な定義があるわけではない。それどころか、語用論とは何かという点についてさえ、意見の一致を見ていないという点は特記してもよいであろう (cf. Leech 1983, Levinson 1983, Mey 1993, Thomas 1995, Yule 1996, Verschueren 1999)。本小論では、Kawamura 2005 の語用論の定義に従って論を進めるが、差しあたって、話者が言語使用を通じて実現しようとした goal が首尾よく達成できなかった場合を語用論的失敗と呼ぶこととする。ただし、以下で扱う she と homely の許容度、特に後者は社会言語学の問題も多分に含んでいる。この点に関しては、optionality という観点から語用論と社会言語学との境界を論じている Thomas 1995 を参照のこと。さらに語用論と他分野、特に意味論との関わりに関しては、たとえば、Gazdar 1979, Stankler 1972 等を参照のこと。
- 3) 日本においても 2006 年から実施されている TOEFL iBT においては重点項目の一つとして pragmatics が挙げられている。
- 4) 辞書をはじめ語学教材における語用論の扱いを判断する際、既存の文献を基に特定の記述あるいは注記の有無のみを問題とした文献も多いが (e.g. Otani 2006)、そういった手段では正確な判断は難しいであろう。語用論情報に関して言うと、使用者にとって必要な情報を判別する客観的手段が現時点ではないからである。
- 5) 本調査は株式会社旺文社の辞書プロジェクトおよび論者のパーミンガム大学における博士論文の予備調査として、旺文社、有限会社ワード・ワークスの後援を得て実施された。また、実施後に方法論や結果の扱いを見直す上で平成 17 年度および 18 年度の成城大学特別研究助成の交付を受けた。ここに記して感謝の意を表したい。
- 6) 川村 (2006) においても同じ観点から he を一般学習者向けに解説しており、本調査のような状況における代替表現も示している。
- 7) 今回は単に she の方がわずかに英米差が大きかったため she のみを扱っているが、目の前にいる相手の性別のみを変更した he の場合も調査を行っており、she とほぼ同じ結果を得た。
- 8) 川村 (2006) においても同語を一般学習者向けに扱っている。
- 9) この語の場合は特に社会言語学的な問題を多分に含んでいるが、言語使用者の語用論的判断は音韻から形態論的なものまで多岐にわたるものであり (cf. Verschueren 1999)、かつ実際の言語使用のいずれのレベルも語用論的失敗の原因となりえるものである。したがって、ここでは語用論の一部として扱うこととする (注 2) も参照)。
- 10) 辞書等の homely の記述を参考として設定したもので、論者が女性に対してこういったイメージを持つものではない。
- 11) 今回、3 冊の辞書の記述を参照してみたが、この場合、単に英用法、米用法の区別を示す社会言語学的地域レベルだけでは十分とは言えないであろう。  
さらに、最近では語義の配列に関しても頻度順を謳った辞書が多いが、今回引用した 3 冊ではいずれも容姿を指す用法が人の性向を指す語義 (CALD2 は人とは限らない) の後に来ている。この 3 冊はいずれも英国の出版社から出たものであり、米国語よりも英国語に重点を置いているのかも知れないが、今回の調査の結果を踏まえて考えると、修正が必要となるであろう。近年辞書編纂で中心的な役割を果たすようになりつつあるコーパスは基本的に語義の情報を含んでおらず、こういった問題について考える上ではアンケートといった調査も有効だと言えそうである。

語用論的英米差に関する覚書

〔参考文献〕

- CALD2: 2005. *Cambridge Advanced Learner's Dictionary*, second edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- COBUILD5: 2006. *Collins COBUILD Advanced Learner's English Dictionary*, fifth edition. Glasgow: HarperCollins
- OALD7: 2005. *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*, seventh edition. Oxford: Oxford University Press
- 東照二 . 1994 . 『丁寧な英語・失礼な英語』東京：研究社 .
- 安西徹雄 . 1982 . 『翻訳英文法』東京：パベル・プレス .
- 柏野健次 . 1996 . 「ポライトネスの一側面」. 『英米文学会誌』第 32 号 , 15-25 .
- 川村晶彦 . 2005 . 「日本人英語学習者の語彙レベルにおけるマイナスの転移と語用論的失敗の危険性」日本英語表現学会第 12 回研究会 . 東京：跡見学園女子短期大学部 . 12 月 3 日 .
- . 2006 . 『日本人英語のカン違い・ネイティブ 100 人の結論』東京：旺文社 .
- ジャパンタイムズ(編) . 2000 . 『LIVE from N.Y. ニューヨークをまるごと聞き取ろう』東京：ジャパンタイムズ .
- . 2003 . 『LIVE from London ナマのイギリス英語を味わう!』東京：ジャパンタイムズ .
- 福田浩子 . 2001 . 『英語の作法 やって良いこと・悪いこと』東京：講談社インターナショナル .
- 松本安弘・松本アイリン . 1987 . 『英語の敬意表現ハンドブック』東京：北星堂書店 .
- 脇山怜 . 1990 . 『英語表現のトレーニング - ポライトネス・イングリッシュのすすめ』東京：講談社 .
- Gazdar, G. 1979. *Pragmatics: Implicature, Presupposition and Logical Form*. New York: Academic Press.
- Kawamura, A. 2005. "The Speaker's Command of Linguistic Resources to Realise Their Intent, a Definition of Pragmatics". *Social Innovation Studies* 1/1, 79-94.
- . 2006. "Problems in Incorporating Pragmatics into EFL Lexicography". In Shin'ichiro Ishikawa, Kosei Minamide, Minoru Murata and Yukio Tno (eds.), *English Lexicography in Japan* Tokyo: Taishukan, 168-81.
- Leech, G. N. 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman.
- Leech, G. N, and J. Thomas. 1987. "Pragmatics and Dictionary". *Longman Dictionary of Contemporary English*, second edition. Harlow: Longman. F12-3.
- Levinson, S.C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mey, J. L. (1993) *Pragmatics: An Introduction*. Oxford: Blackwell
- Nishikawa, M. 2006. "Pragmatics of Adverbial Discourse Markers in English-Japanese dictionaries". In Shinichiro Ishikawa, Kosei Minamide, Minoru Murata and Yukio Tno (eds.), *English Lexicography in Japn* Tokyo: Taishukan, 182-93.
- Otani, M. 2006. "A Study of Pragmatic Information in English and Japanese Bilingual Dictionaries: From the Perspective of Apology and Gratitude Expressions". In Shinichiro Ishikawa, Kosei Mi-

## 社会イノベーション研究

- namide, Minoru Murata and Yukio Tno (eds.), *English Lexicography in Japan* Tokyo: Taishukan, 206-19.
- Stalnaker, R. C.1972. "Pragmatics". D. Davidson and G. Harman eds. *Semantics of Natural Language*. Dordrecht: Reidel, 380-97.
- Thomas, J. 1983. "Cross-cultural pragmatic failure". *Applied Linguistics* 4/2, 91-112.
- . 1995. *Meaning in Interaction: An Introduction to Pragmatics*. Harlow: Pearson Education.
- Verschueren, J. 1999. *Understanding Pragmatics*. London: Arnold.
- Yule, G. 1996. *Pragmatics*, Oxford: Oxford University Press.

## 付録

